

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏 名 関 口 順

本論文は著者が約40年に及び古代中国思想を専門に研究してきた多彩な成果を、その専門家以外の研究者にもわかるような形で平易に提示したものである。すでに同名の著書として、昨年(2003年)、東京大学出版会の東洋叢書の1冊として公刊されている。

本論文は本論5章と付章(文献案内)とから成り、構成上、各章の内容が有機的で緊密な関係を相互に持つように工夫されている。第一章「儒学の形成」では、旧来の通説において安易に想定されていた孔子の歴史像を再検討し、孔子以後に儒学という学派が形成されていく様子が最新の研究成果を盛り込みながら活写され、本書全体の総論的な役割を果たしている。第二章「天と人との相関」では、中国思想において重要な位置を占める<天>の概念を<人>との関わりの中なかで考察し、戦国時代から漢代にかけての展開が明らかにされる。第三章「天下の構造」では、<天下>という語の起源がなお未詳であることを指摘したのち、司馬遷『史記』を例に、漢代におけるこの概念の意義が論じられる。第四章「道の行われた時代」では、夏殷周の三代が儒学の中なかで理想の時代として仮構・定着されていく経緯が解説される。第五章「儒学の経書とは」では、漢代において儒学が経書を定めることによって思想界の主流となっていく様相が述べられる。付章は内外の中国思想研究史を、代表的な著作を批評しながらまとめたもので、著者自身の立場を明示する役割を果たしている。

このように、本論文は戦国時代から前漢末、すなわち西暦紀元前4世紀から後1世紀にかけての中国思想の動向を、儒学のかたちが成立した過程に焦点を合わせて叙述し、縉紳先生への注目や、天下観念・三代観念などについて、旧来の通説的理解に対する著者の創見を随所に示している。古代中国思想研究は、研究テーマの細分化や出土文物など利用史料の特殊化といった傾向により、同じく中国思想を専門としている者にとってすら理解するのが困難になってきている。著者はその現況を平明な文体でわかりやすく紹介し、そのうえで自説を展開するという叙述方法を採用しているため、本論文が学界に裨益するところは大きい。

しかし、その一方で、いくつかの問題点も存する。著者は本論文を「儒学のかたち」と題し、儒学の構造的特質を提示することを目的としたとするが、その叙述は上記のように特定の時代を対象として思想的になされている。また、当該時期に形成された緯書思想に対する分析がないため、叙述の厚みに欠ける憾みがある。三代観念についても、それが生成していった過程を史料に沿って整理する作業は充分なされていない。このように、本論文には学術的な問題点も若干残るが、今後の学界全体の展開のうえで果たす役割は大きい。

本委員会は、著者が長年の研鑽の成果として本論文を提出したことを高く評価し、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。